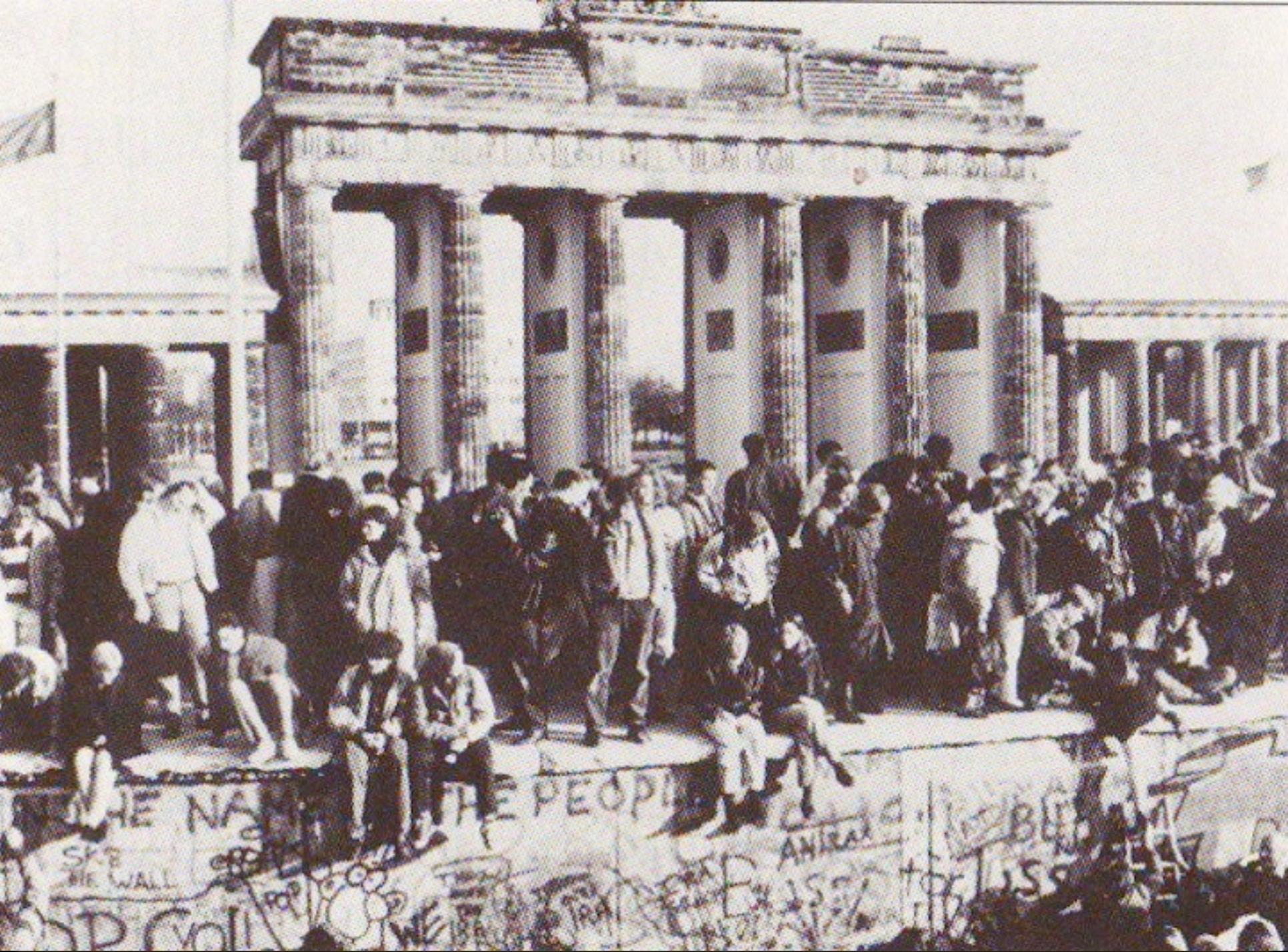


2008.6.3

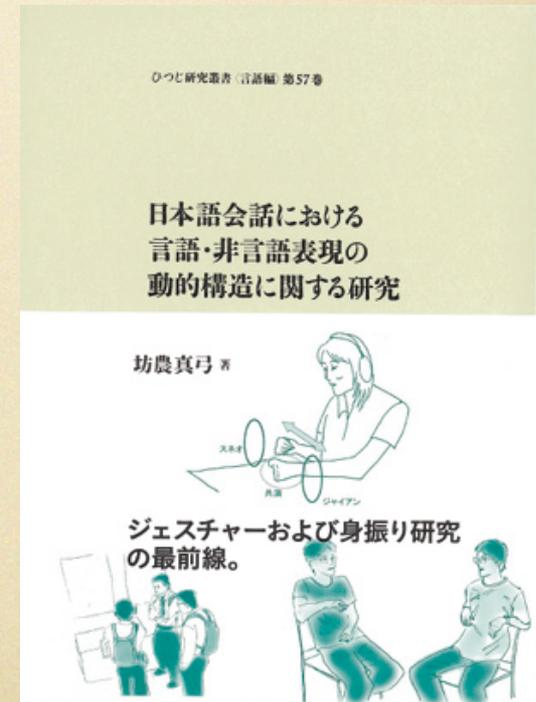
仕事としての出版編集者

- 東京学芸大学 職業入門D
- 株式会社ひつじ書房 代表取締役 松本 功
- www.hituzi.co.jp



ひつじ書房とは

- 1990年創業の言語学出版社
- 日本で一番言語学の研究書を出している







私はどのようにして学術系編集者・出版社社長になったのか

広辞苑の編者の名を冠した新村出賞の受賞本を
3年連続で出した「ひつじ書房」社長

松本功さん(44)

ひつ



自分の会社を業界の「こま粒」と言う。機勢7人でコツコツと学術書を作る。そんな出版社を出す本が、広辞苑の編者の名を冠した新村出賞に3年続けて輝いた。日本の語学研究の優れた功績をたたえる賞で、受賞作「複合動詞・派生動詞の意味と統語」は、98年から続く言語学シリーズの39冊目。過去2度の受賞も同シリーズからで、

地道な仕事が続いた。

「同じ出版社の受賞さえ快挙といわれたのに、3年連続には私もおびっけり」

90年、学術専門の出版社として創業。1冊1万円以上はさら、3万円近い本もある。本を出したい研究者は多いが、「いくら出せますか」という相談が後を絶たないのが悩みだ。「印刷会社ではなく出版社。お金を出して買ってもらえる本を作るのが仕事です。そうして初めて、研究の社会的な価値が出る」

95年、自力でウェブサイトを立ち上げたインターネット界の先駆け。掲載する「帝王の目録」は、小さな出版社に冷たい流通制度に苦言を述べ、時評の切れもよい。

本を読む力の底上げも狙う。読者の書評を公開、ビジネス支援図書館推進協議会の事務局長として奔走。図書館員との人脈づくりに励む。ネットや携帯メールに没頭する人たちは本を読むか。

「本という知と電子社会は別物と考えても進歩がない。すみ分けではなく、すみ合わせを考えていきたい」

文・写真 平子 義紀

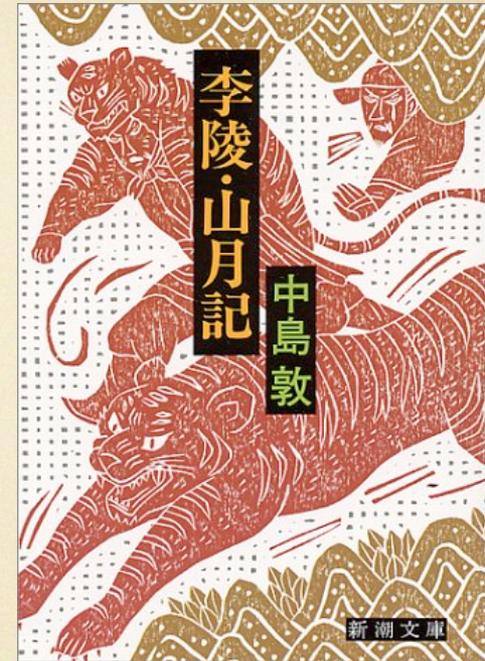
私はどのようにして学術系編集者・出版社社長になったのか

- 学生のころ
- 本が好きだったとっていい
- 学部の4年生のころ、出版編集者か新聞記者になりたいと思っていた。
- 具体的な編集者や記者像があったのか、というとそうでもなかった。
- では、何で編集者になったのだろう。書き手や研究者という選択肢(願望として)も可能性としてはあったのかもしれない。
- 小説家になりたいと学部のころは思っていたかもしれない。文学部に入ったというのもそういうことはあっただろう。
- それが現実的な選択肢なのかは不明。

私はどのようにして学術系編集者・出版社社長になったのか

- 何かかたちにしたい、という気持ちはあった。あまり大きな組織では力を発揮できないだろうという予感。
- 大きな組織だと歯車になってしまうのではないか。自分がここにいるぞ、と言えたらいいという願望。
- 不器用な方だから、同じコトを競争しても勝てないだろう。負けずぎらいではあったのかもかもしれない。
- 2番煎じではなくて、自分を誇りたいという気持ちはあった。
- 本は好きで、いろいろなことを読むことは好きだったけれども、本を読んで、インプットばかりしていると、空想の世界から抜け出せないのではないか。自己満足はできても、それで人間として腐ってしまうのではないか。

私はどのようにして学術系編集者・出版社社長になったのか



- 引きこもりであるとか、フリーターといったことばはまだありませんでした。
- 中島敦の山月記という小説があって、虎になってしまう人の話があります。

考えように依(よ)れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、己(おれ)は努めて人との交(まじわり)を避けた。人々は己を倨傲(きょごう)だ、尊大だといった。実は、それが殆(ほとん)ど羞恥心(しゅうちしん)に近いものであることを、人々は知らなかった。勿論(もちろん)、曾ての郷党(きょうとう)の鬼才といわれた自分に、自尊心が無かったとは云(い)わない。しかし、それは臆病(おくびょう)な自尊心とでもいうべきものであった。己は詩によって名を成そうと思いながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交って切磋琢磨(せつさたくま)に努めたりすることをしなかった。かといって、又、己は俗物の間に伍(ご)することも潔(いさぎよ)しとしなかった。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為(せい)である。己(おのれ)の珠(たま)に非(あら)ざることを惧(おそ)れるが故(ゆえ)に、敢(あえ)て刻苦して磨(みが)こうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々(ろくろく)として瓦(かわら)に伍することも出来なかった。

己(おれ)は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶(ふんもん)と慙恚(ざんい)とによって益々(ますます)己(おのれ)の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己(おれ)の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了ったのだ。今思えば、全く、己は、己の有(も)っていた僅(わず)かばかりの才能を空費して了った訳だ。人生は何事をも為(な)さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄(ろう)しながら、事實は、才能の不足を暴露(ばくろ)するかも知れないとの卑怯(ひきょう)な危惧(きぐ)と、刻苦を厭(いと)う怠惰(たいだ)とが己の凡(すべ)てだったのだ。

みなさんは、就職活動のまえに何を考えるのでしょうか。

- アウトプットしたい。かたちにしたい。それを「客観的に」評価されたい。という気持ちがあった。
- 書籍をきちんとしたかたちに作って、誰かに買ってもらって、読んでもらうということがしたかった。自分が何かを作れるということをまず実現したかったのだと思う。一人前とひとまず呼べるようになりたいと思っていました。

みなさんは、就職活動のまえに何を考えるのでしょうか。

- 1年目は新聞社と出版社を受けました。朝日新聞は面接まで行ったのですが、けっきょくどこにも受からず。就職浪人をして、就職浪人中の友人たちと勉強会をはじめました。入試対策の作文を毎週書いていた。友人たちは、業界紙も含めて、新聞社に入った人が多かったです。サンデー毎日のデスクをやっている友人もいます。
- 出版社は募集があるところは、どこでも受けるという気持ちで、小さいところから大きなところまで、かなり受けました。その際、必ず、入社試験を受けるときには、直接行って書類を出して、その時にその会社の出版案内をもらってくるようにしていました。小さい会社の出版物というのは、どんなものを出しているのか、ということもわからないので、入るためにはせめてその会社の刊行物の傾向だけでも知りたいし、受付がないにしろ、仕事場の端っこだけでも見ようと思ったからです。

みなさんは、就職活動のまえに何を考えるのでしょうか。

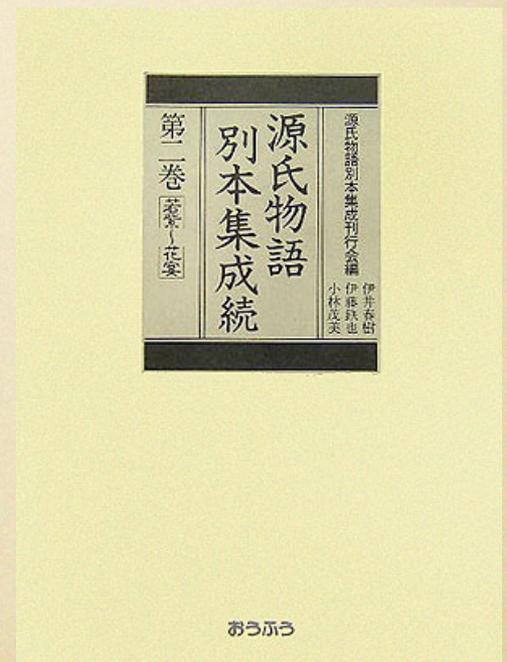
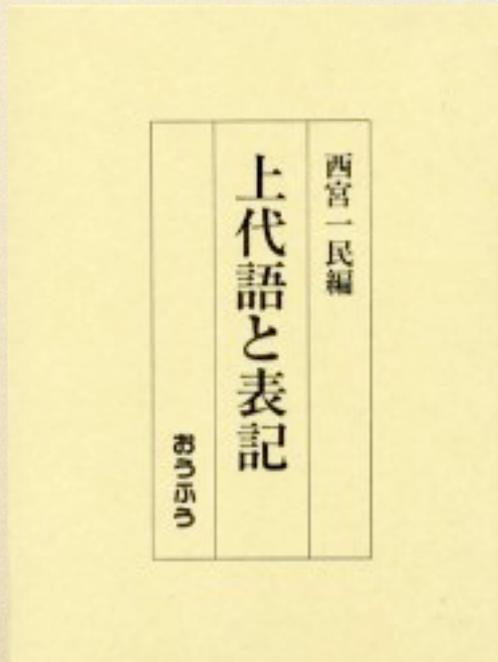
- 一般企業のメーカーも受けましたが、出版社は20社近く受けたと思います。小学館や筑摩書房や早川書房やソニーマガジnzのような音楽系の出版社も受けましたし、書類だけで落とされたところも多かったですし、早川書房は、たぶん、最終面接まで行きました。
- そうこうしているうちに、大学の先輩から国文学の専門書を出している桜楓社が、人を募集していると聞いて、そこを受けることにしました。受けに行ったら、面接で交通費を2000円くれたのでいい会社だと思って、受かるというなあと思いました。
- おかげさまで内定をもらうことができ、3月からアルバイトとして働きはじめました。4月からは社員として働き始めました。研究書の出版社だから、そんなに忙しくもないだろう、好きな本も読んだりできるだろうという安易な気持ちもありました。

みなさんは、就職活動のまえに何を考えるのでしょうか。

- そこにバイトの期間も入れて、5年間、働きました。歩いて帰れるところに住んでいたこともあって、かなり遅くまで働いて、結婚もして、それで独立して自分の会社を作りました。
- 今は、社長ですので人を面接したり、採用の試験をするがわになっています。

出版社の修業時代

- おうふう入社



出版社の修業時代

- 最初に日本語学小辞典を出すというので、項目選びの手伝いをやらされました。すでに今までの国語学辞典の項目があつて、それを50音順に並べられるようにしようということで、地味な仕事でした。それでも、その時の項目名が頭にインプットされていたことはあとで役に立っています。
- その並び替えを当時どこかの理系の大学の大学院生であった人にプログラムを組んでもらって、それを組み上がってから、並び替えるということをして、それを印刷して帰ると事務所をでるのが、夜の3時とかの時間になって、それから、4畳半の下宿に帰るという日々がありました。
- 当時はまだwindowsも無くて、ms-dosもまだない時代で、非常に時間が掛かったのですが、そういうプログラムを動かして、何かを作ることができるという経験はあとで役に立っています。

出版社の休業時代

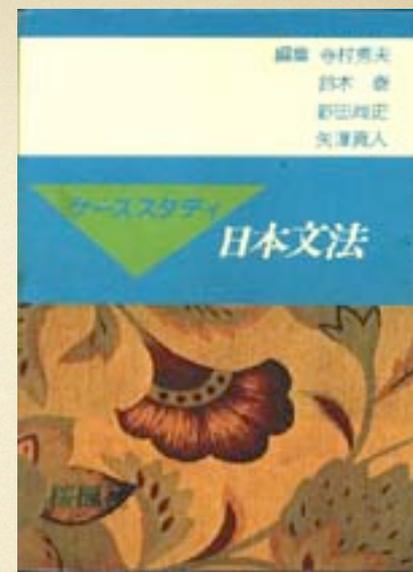


- そうして、その後は編集よりも製造担当になって、本が重版になると紙型を取ってきて、印刷所に運ぶというような製造の仕事に変わりました。この時に本を物理的に作るということの仕組みや仕掛けについて学ぶことができました。コストや納期、どこがたいへんであるか、などといった作る工程をすることができました。外注先の値段の交渉などもやったわけです。これも後で非常に役に立ちました。
- 製造担当も、小さい会社ですので、季節によっては営業にでることがあります。大きな会社なら、編集部は編集、営業部は営業、製造部は製造と分かれています。が、小さい会社のわるいところとかよいところは、あまり境がないところかもしれません。

出版社の修業時代

- 私は早稲田の出身なのですが、早稲田の近くの大学に行ったとき、私よりも5つくらい年上の研究者の方に知り合いました。その方が、現代日本語の研究がいま、非常に盛んになってきていると言われました。桜楓社は、国文学の出版社でしたので、現代日本語についてはほとんどコミットしていませんでしたし、社としてあまり関心がなかったと思いますが、何はともあれ、現代日本語の研究は面白いということを何度も言われて、私もそうなんだな、という気持ちになりました。
- その方とつきあっている内にその方と一緒に『ケーススタディ日本文法』という本の企画を立てました。その企画を社長に持って行ったときのことは、今でも覚えています。必死に説得したら、やっていいよという話になりました。簡単にオーケーがでるとは思っていませんでしたので、驚きました。

出版社の休業時代



- そして、執筆者の方を集めて編集会議を行って、その半年後に本になりました。普通はそんなに早くには本がでることはないのですが、奇跡的に本が出ました。4月12日だと思います。そして、それが少ない部数でしたが、2週間後くらいに重版になってしまいました。それがもって人生が変わったのかも知れません。
- 自分が著者の力を借りて、いっしょに作った本が、きちんと人に受け入れられた、ということはとても大きな力になったと思います。
- このことに力を得て、日本語学の教科書を何冊か、その後の数年に刊行しました。国語学会に行って、著者を見つけたり、出張に行くたびに研究室を訪問して、知り合ったり、先生方の話を聞いて面白いと思ったもので企画を立てたりということを進めました。

出版社の休業時代



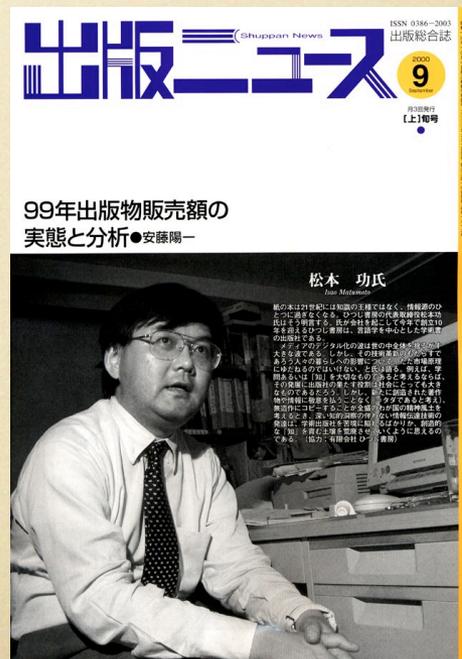
- そんな中で、教科書ではなくて、その時の著者の単著を出したいと思って、それで企画を出したのですが、それは無視はされなかったのですが、優先順位が低い。私はこの路線で勝負しようとしていたのに、それなら、自分でやると思い立ちました。
- 独立しようという気持ちです。それに、1980年代の後半は、ソビエトが崩壊し、1989年にはベルリンの壁が壊されました。今まで、壊れないと思われてきたものも壊れるときには壊れるものだ、と思って、それなら、自分でも何かを壊してみよう、自分で作ってみよう、と決意したわけです。それで、1990年に自分の会社を作りました。
- 24歳で就職して、28歳最後の日に退職しました。最初に就職した時には、自分は自分で何かを作ることができる人間になりたいとは思っていましたが、会社を作るなどと言うことは全く考えていませんでした。
- そして、18年が過ぎて、2010年には20周年となるというウソのような気持ちです。

創業期

- 1990年に創業。
- 1990年はパンフレットを配るのみ。
- 1991年に1冊目、2冊目。
- 取次店は、口座を開いてくれず。
- ほぼ、直販のみ。
- それでも500口の方に予約をもらう。

創業期

- 1995年にHPを作ったこと（文科系でははじめて）が取り上げられる
- 『本とコンピュータ』 前期で評価
- T-Timeの発売
- 本の学校でスピーチ
- 『誰が本を殺すのか』



『誰が「本」を殺すのか』



- 「本の学校」のシンポジウムで、あとあとまで記憶に残った場面がある。電子出版に積極的に取り組んでいるひつじ書房代表取締役の松本功（39歳）はオンデマンド出版の可能性について触れmかつてのベストセラー本は消費財として買われたが、デジタル時代を迎えたいま、著者と読者の関係は根底から変わるかも知れない、といった。

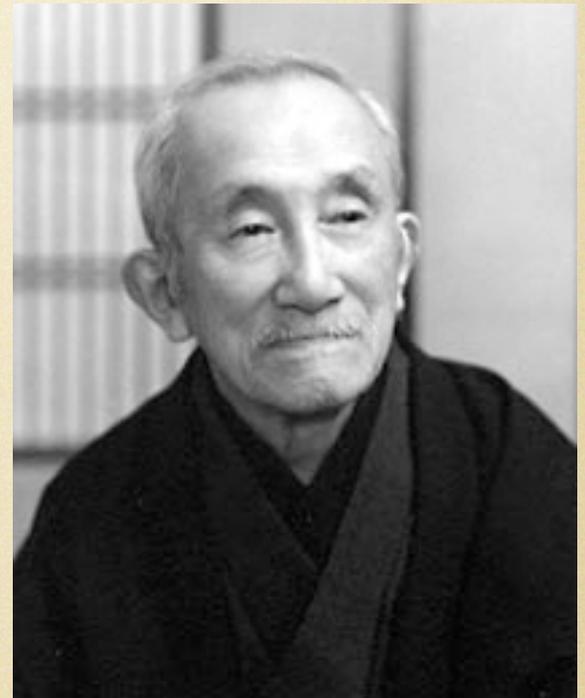
- 昔のように何万人という読者がいれば、その本を支えているのは私だという意識はなくてもよかったですと思います。あるテキストがあって、もし、書き手がいい書き手であって、その書き手を世に送り出した出版社がいい出版社であったならば、最終的にいいコンテンツを育てていくのは読者自身であるはずで、それが昔だったら何十万人だったかもしれない。それが千人とか数千人の単位になってきている。一人の読者という意味が、本を買う人の千分の一の重みを持ってきている。
- そうなると、これは単なる本の消費者ではなくて、一種のささやかなパトロンともいうべき存在になってくる。読者であるあなたはもうパトロンなんだと、はっきり伝えてもいいのかもしれない。

ビジネス支援図書館活動

- 図書館活動
- ビジネスコンサルタントと図書館運動家を結びつける
- 図書館の生き残り策

言語学の出版社として

- No.1
- 新村出賞 4年連続受賞
- 人数は少ないけれども、特徴ある出版社として



出版・編集の捉え直しの時代

- マスメディアではなく、ミドルメディア。 <http://www.hituzi.co.jp/kotoba/20080514ns.html>
- 人間の創造力を支援する社会的ヒューマンサービス
- 知識の連携化
- googleを越えて／手を携えて
- 新しい時代へ



<http://www.probe.jp/EPIC2014/>

小さい会社の可能性

- 自分で会社を作るのもいいかもしれない。
- 会社を作るくらいの気持ちで、挑戦してみてもどうだろう。
- 意外と人がやっていないことは少なくない
- ニッチかも知れないが？